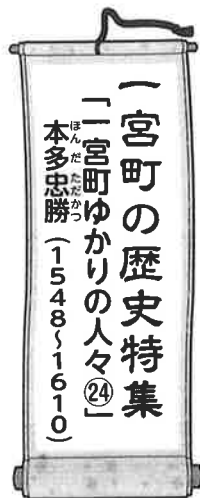


令和2年12月号



一宮町の歴史特集
「一宮町ゆかりの人々(24)」
本多忠勝(1548~1610)

本多忠勝は三河国(現愛知県)出身の戦国武将です。徳川家康に仕え、数々の戦功を重ね、徳川四天王の一人に名を連ねています。生涯50数度の戦でかすり傷一つ負わなかったと伝えられています。

天正18年(1590)、豊臣秀吉による相模国小田原城(神奈川県小田原市)の後北条氏攻めが行われ、後北条氏が滅亡すると、関東の大部分は徳川氏に与えられます。忠勝は上総国に10万石を与えられ、初めは万喜城(いすみ市)、のちに小田喜城(現大多喜城)に入りました。この際一宮地域も本多氏の領国に組み込まれたとみられます。

忠勝は慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの功績により伊勢国(現三重県)桑名(10万石)へ転封、大多喜は忠勝の次男の忠朝(1582~1615)に別家として5万石を与えられます。なお関ヶ原の戦いに参加した本多軍には新築村(現一宮町下村周辺)から5名が参陣したといわれています(『一宮町史』1964年より)。

忠朝時代にはどうやら一宮地域は本多氏の支配から外れたようです。そののち元和3年(1617)には一宮地域は信濃国(現長野県)飯田藩の脇坂氏の領地に組み込まれています。

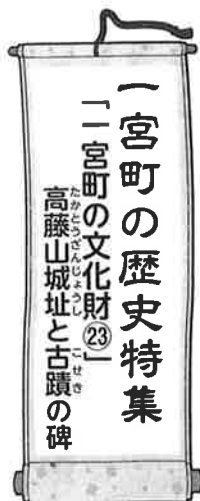
なお本多忠朝は慶長20年(1615)の大坂夏の陣で奮戦し、討ち死にしています。

写真の古文書は「岩沼高浜方塩浜置場帳写」(町指定文化財・個人所蔵・非公開)という資料です。慶長6年の検地の際に大多喜藩に370石の不足があり、これを補うために領内沿岸の村々に塩年貢が割り付けられました。これを「浜方」といい、岩沼村(現長生村)に役所が置かれ年貢米を取り扱っていたため「岩沼高」と呼ばれています。この村々の中には現一宮町域の村々も含まれており、本多家と一宮の関係を示す貴重な資料です。



【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (学芸員 江澤一樹)

令和3年1月号



一宮町の歴史特集
「一宮町の文化財(23)」
高藤山城址と古蹟の碑

高藤山城は睦沢町との境の山間部にある山城で、標高約80mの天然の要害です。高塔城とも呼ばれます。

この城は平安末期の豪族・上総広常の居城跡と伝わっていますが、実際のところは不明です。広常居城跡としては睦沢町やいすみ市にその伝承が残っています。高藤山城には戦国時代末期の構造がみられることや広常の時代の居館と考えると、居館があったとするならば城の麓であろうと考えられます。

山頂には広常の業績を後世に残そうと、文久2年(1862)に時の一宮藩主・加納久徴(1813~1864)が建てた「古蹟の碑」があります。城址と石碑は昭和53年(1978)に町の史跡に指定されています。

戦国時代の構造の城、と述べましたが実はその頃の城主等は分かっています。広常の末裔だという金田氏が住んだという「石井城」がこの城であるとは定する見方もあります。

享保11年(1726)の絵図には「正木左近大輔」「鶴見甲斐守」が城主

だったと記されています。この両者は一宮城の城主だったとみられる人物です。一宮城は発掘調査の結果火災にあっている(おそらく1560年代)ことがわかっており、火災後はどうやら使用されなかったらしいことが指摘されています(『中世の一宮』2004年)。

戦国時代中期までの一宮城が現在の一宮城で、戦国時代末期の一宮城は高藤山城を指していた可能性も捨てきれないと思います。あくまでもこれは私見ですが、今後新しい発見があることで、少しずつ真実に近づけるのではないかと期待しています。



▲ 東側から見た高藤山城址

【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (学芸員 江澤一樹)